

“東日本大震災からの復興のための実践活動及び研究” 成果報告書

1. 実践活動・研究の名称

東日本大震災被災地の消防職員・消防団員のストレスケアとケアメンバーへの支援

2. 実践活動・研究の成果

(1) グループ代表者

①氏名：松井豊

②所属・職名：筑波大学人間系・教授

③構成メンバー（ 14 ）人

氏名：畑中美穂

所属・職名：名城大学・助教

氏名：立脇洋介

所属・職名：大学入試センター・特任助教

氏名：幾田雅明

所属・職名：東京消防庁・消防司令補

他、東京消防庁惨事ストレス部会メンバー

(2) 実践活動・研究の成果

- ・ 4000 字程度で記してください。図表を入れる場合は、数点程度としてください。
- ・ 復興にどのような貢献をしたか（する可能性があるか）を明確に記述してください。
- ・ 成果に基づいて論文投稿や学会発表を行った場合は、そのリストを付してください。
- ・ 学会ホームページで公開しますので、著作権やプライバシーの保護にご留意ください。

1. 概要

東日本大震災の津波被災地で活動した消防職員に対してストレスケア支援活動を行った。

2. 実施内容

津波の被害を受けたA消防本部（岩手県）とB町（宮城県）の消防署において、職員のストレスケア支援活動を行った。

2-1 被災A市消防本部へのストレスケア支援活動

A市消防本部（岩手県）の消防職員に対しては、東京消防庁惨事ストレス部会有志による、傾聴ボランティアの支援を行った。ボランティアは、東京消防庁で惨事ストレスの研修を受けた支援デブリーファーカーが中心で、臨床心理士2名・精神保健福祉士1名を含んでいた。

表1 A市消防本部への介入

回数	日程	ボランティア数
第1回	2011年5月20～22日	5名
第2回	2011年5月27日～29日	6名
第3回	2011年6月17日～19日	5名
第4回	2011年7月8日～10日	7名
第5回	2011年8月29日	4名
被面接者計94名（全職員の89.5%）		
調整	2011年11月8日	1名＋松井
第6回	2012年1月21～23日	10名＋松井
被面接者累計104名（2回面接者を含む）		

A市消防本部への支援に関して、第2回～第4回及び後述の調査経費の一部について、本プログラムの助成を受けた。第5回以降およびB町消防署への支援は筑波大学東日本大震災復興プロジェクトの助成を受けた。A市の第1回はボランティア有志の自費で介入している。

継続的支援の必要性を把握するため、7月20日から8月1日まで、被面接者を対象として質問紙調査を実施した。職場配付、個別郵送回収形式で、無記名回答であった。有効回答者数は62名（有効回答率66.0%）であった。

今回の活動に関する感想は図1の通りで、「話をした後に、自分に対して辛い感じがした」（4.8%）や「嫌なことを思い出して辛かった」（8.1%）が一部に見られたが、「話を聞いてもらえてすっきりした」（50.0%）など、肯定的な評価が多く見られた。

活動に対する全般的な評価（図2）を見ると、「とても良かった」と「よかった」が81%を占めており、高い評価を受けていた。

自由記述を見ても、「当地区では他人に弱みを見せない、辛いことを辛抱することが美德とされる土地柄ですので、他人に辛いことを話すのが苦手だと思います。でも、同業者が話を聞いていただき、肩から力が抜けるようでした。後輩へも話を聞いてやらなければと思いました。今後もよろしく願います。」や、「この様な機会を設けてもらい大変

良かった。同僚に言えないこと等たくさん話を聞いてもらい、心が安らいだ。今後他の地域でこの様な事があった場合、手助けしたいと思った。」など、同じ立場の消防職員が傾聴したことが有効であったことが示されていた。

継続支援の希望が見られたので、2012年1月に第6回（被面接者にとっては2回目）の活動を行った。

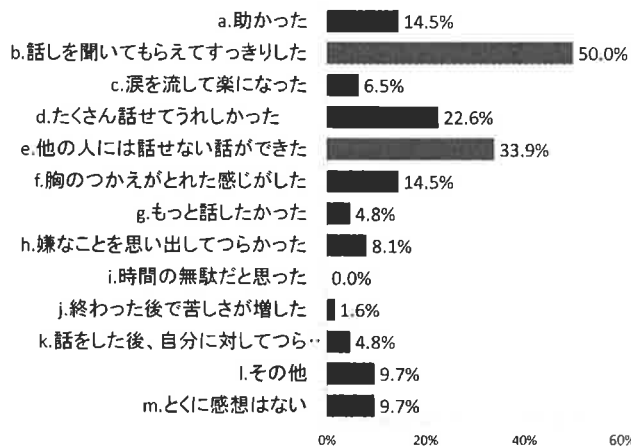


図1 A市消防本部への活動の被面接者の感想（単位%、N=62）

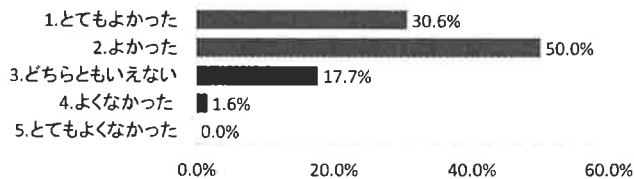


図2 A市消防本部への活動の被面接者の全体的評価（単位%、N=62）

2-2 被災B町消防署へのメンタルケア活動

津波で被災したB町（宮城県）の消防署に対しては、総務省消防庁緊急時メンタルサポートチームとして松井他が5月に危機介入に入ったが、面接した職員からの継続的支援の要請を受けた。そのため、総務省とは独立して2回にわたり、個別面接活動を行った。面接は精神保健福祉士・臨床心理士・産業カウンセラー・訓練を受けた消防職員などが2名単位で行った。

表2 B町消防署への介入

回数	日程	被面接者数	面接者数
第1回	2011年8月8～9日	18名	7名
第2回	2012年2月12日	5名	3名

多くの職員が悲惨な被災体験を語ったが、守秘の関係で詳細を記すことはできない。

2-3 メンタルケア活動者への調査

2012年2月中旬に、上記2カ所の活動に関わった消防職員を中心とする14名（松井を除く）に、活動の感想を尋ねる質問紙調査を行った。個別郵送配布回収形式で無記名回答であった。

11名から回答があり、全員がこの活動が「勉強になった」と感じていた。自分にとって「役立った」（6名）「スキルアップになった」（6名）などの肯定的評価が見られた。支援者にとってこの支援活動は成長の契機になっていたものと考えられる。

ただしその一方で、「疲れた」（6名）や「自分にストレス反応が出た」（6名）という回答も見られた。現地では毎晩のように、活動後の移動車中や被災地外のホテルで、ストレス軽減を目的としたグループミーティングを開いたが、被災消防職員のあまりに悲惨な話を聞くことで、ストレスや共感性疲労を感じたものと推定される。

なお、自由記述の中に「交通費、宿泊費を助成していただいているとA市本部に説明させていただいたところ、A市本部としても支援を受けやすくなったと思われます。」との回答があり、助成金の意義が確認された。

2-4 考察

本支援活動を通して、広域災害における災害救援者の惨事ストレスケアに関して、下記の知見を得ることができた。

- ・ 自責や無力感を感じている職員に強いストレス反応が見られた。
- ・ 訓練された同業の消防職員（ピア）による傾聴は、被災地の消防職員に、抵抗なく受容された。
- ・ 外部からの介入により、職場内では話せない問題も表出することができた。
- ・ 本活動で実施した継続的支援は、被災地職員のニーズと適合していた。
- ・ 一部の被災消防職員には重い症状も見られ、地元医療機関に紹介された。ストレスケア専門家との連携も必要であることが確認された。
- ・ 被災地へのメンタルケア活動は、被面接者だけでなく、活動者自身の成長をもたらした。
- ・ 活動者自身にもストレスが生じることを自覚し、共感的疲労が深刻化しないように支えてゆく必要がある。

社会貢献の面から見ると、初期段階での治療機関への紹介や動機づけの向上などの点で、2地域の消防組織の職員のストレスケアに一定の成果があったと考えられる。

2-5 成果の発表

B町での活動概要は、西澤匡史ほか（編）『いのちを守る』ヘルス出版に記録されている。また、日本心理学会第75回大会のワークショップ及び同第76回大会の公開講座において、本活動の概要を発表した。

2012年9月22日

“東日本大震災からの復興のための実践活動及び研究” 会計報告書

活動・研究名称	東日本大震災被災地の消防職員・消防団員のストレスケアとケアメンバーへの支援	
代表者 氏名・所属	松井豊・筑波大学人間系	

1. 助成額	¥600,000
2. 支出合計	¥630,750
(1) 機器・備品	
(2) 消耗品	
1)	
2)	
3)	
(3) 旅費・交通費	
1) 5月27-29日釜石消防支援旅費(167500+13500)	¥181,000
2) 6月17-19日釜石消防支援旅費	¥173,900
3) 7月8-10日釜石消防支援旅費(185400+49500+34100)	¥269,000
(4) 謝金	
1)	
2)	
3)	
(5) その他	
1) 郵送料(2740+880+3230)	¥6,850

※ 領収書は各費目ごとにA4用紙に貼付し、通し番号を付けてください。